

特集 **新外来診療棟完成**

CONTENTS

- 2 **さらなる100年をめざして**
九州大学病院長 久保 千春
- 6 **歯科と医科の連携で、シームレスな歯科医療を提供**
副院長／口腔総合診療科長 樋口 勝規
- 7 **地域と連携しながら、小児医療・周産期医療の充実をめざす**
副院長／小児科長／小児医療センター長 原 寿郎
- 8 **専門家集団による総合力で、3次救急医療に立ち向かう**
救命救急センター長／先端医工学診療部長 橋爪 誠
- 9 **「未来医療」を「現実医療」とするための先進的取り組み**
高度先端医療センター長／呼吸器科長 中西 洋一
- 10 **看護の専門性を発揮し信頼される
より質の高い看護をめざして**
看護部長 中畑 高子
- 11 **地域医療の未来を支える優れた人材育成のために**
臨床教育研修センター長／総合診療科長 林 純
- 12 **世界最高水準の検査機器で
医療全体の底上げを図る**
放射線科長／放射線部長／先進予防医療センター長 本田 浩

九州大学病院



新時代の医療ニーズに応えた 新病院のすべてが完成



九州大学病院長 久保 千春

九州大学病院は100年以上の長い歴史を持ち、日本における近代医学発祥の地として、また地域の中核病院として重要な役割を果たしてきました。近年における医療の進歩はめざましいものがあり、医療に対するニーズは日々進化し、高度になっています。加えて平成16年には国立大学法人法が施行され、大学病院にも独自の運営が求められるようになりました。

こうした新時代の医療ニーズおよびシステムに対応すべく、12年をかけて整備してきた新病院再開発計画が、本年9月28日の外来診療棟のオープンをもって完了します。新病院の完成により、九州大学病院が目標とする「患者さんに満足され、医療人も満足する医療」を提供するための理想的な環境が整ったと自負しています。

さらなる100年をめざして



西日本地域の中核病院として 診療・教育・研究を推進

九州大学病院には西日本地域の中核病院として、地域の診療・教育・研究を担う大きな責任があります。加えてアジアの玄関口としての役割も忘れてはなりません。昨年10月に開設したアジア遠隔医療開発センターは、アジアを中心とした世界23か国108施設とネットワークを築き、諸外国の基幹病院と間で遠隔医療教育に取り組んでいます。今後は国際連携をさらに強め、海外からの医療相談や患者さんの受け入れなども積極的に行っていく予定です。

診療の分野では、他の病院では対応が難しい難治性疾患や移植医療、3次救急などの高度先進医療を担うことが期待されています。昨年、本院は福岡県の「がん診療連携拠点病院」に指定され、がん医療従事者への教育を含め、がん診療における地域連携に取り組んでいます。院内のがん治療においても、多くの診療科が連携しながら診断や治療を進めていく体制が確立され、患者さんのQOL向上のための緩和ケアも積極的に実施しています。



がん治療のみならず、各診療科が連携して取り組む集学的医療は今後ますます求められていくでしょう。九州大学病院では集学的施設の整備にいち早く取り組み、小児科や産科等が連携した総合周産期母子医療センターに加え、本年5月にはメンタル面の問題にも踏み込んだ「子どものこころの診療部」を開設しています。ハートセンターは心臓病に関する内科・外科病棟が集約された専門施設であり、ブレインセンターは脳疾患の総合的な診断治療施設として機能しています。新たに誕生する「再生歯科・インプラントセンター」は、歯科部門の集学的施設として最先端の歯科医療を提供していきます。

教育の分野では、不足する小児科・産科の医師を重点的に育成するプログラム、女性医師の復帰を支援するプロジェクトなどのほか、新たにスタートした「北部九州における循環型高度医療人養成事業」があります。これは地域の大学病院と連携して高度な医療人育成をめざすものです。内視鏡外科手術トレーニングセンターでは、21年8月現在で既に800人余りの全国の医師が

プログラムを受講していますし、病院全体で看護師、薬剤師、検査技師、放射線技師などのコ・メディカルの教育にも力を入れています。

研究の分野では、基礎研究の成果を臨床の現場へつなぐ九州初のトランスレーショナルリサーチの拠点として、文部科学省の「橋渡し研究支援推進プログラム」に採択されました。基礎研究を応用した先端医療の開発をこれまで以上に推進していきたいと考えています。また、現在も苦む油症患者さんの治療法開発のために、油症ダイオキシシン研究診療センターを昨年4月に設け、研究に取り組んでいます。

| 南棟・北棟 | | 外来診療棟 | |
|-------|--|-------|---|
| 12 | 小児科 小児外科・小児専門外科 矯正歯科 小児歯科 | 5 | 腎臓科 |
| 11 | 耳鼻咽喉科 口腔外科 歯科 歯科材料 全身管理歯科 | 4 | 心療内科 精神科 外科 先端理工学総合センター・マシナリ 産科 婦人科 産婦人科 ベイコンクリニック（産科・産科生） 再生歯科・インプラントセンター 高度先端医療センター・管理部門 |
| 10 | 皮膚科 消化器科 泌尿器科 泌尿器科 呼吸器科 呼吸器科 消化器科 消化器科 | 3 | 内科 ハートセンター-外来 循環器内科 血液・腫瘍内科 心臓血管外科 皮膚科 皮膚科 産科 産科 |
| 9 | 病棟 | 2 | 神経内科 脳神経外科 泌尿科・独立部・腎臓・腎臓外科 精神科 精神科 子どものこころの診療部 がんセンター（外来化学療法室 緩和ケア がん相談支援室） |
| 8 | ハートセンター-心臓のデータセンター | 1 | 総合診療科 整形外科 泌尿科 地域医療連携センター 高度先端医療センター-窓口 診察受付 入院・外来受付 入院・検査受付 CO管理室 |
| 7 | ハートセンター-生体検査部門 （心エコー、運動負荷心電図） | 01 | お薬水出し口（通院時・帰院時・休日） 検査室・PETセンター （PET-SPECT/CT） |
| 6 | 心電図 診察室 調剤 薬師 | | |
| | 自己血液貯留 | | |
| | ブレインセンター | | |
| | 内視鏡検査 | | |
| | MR検査 | | |
| | 結合線検査 | | |
| | ×線検査 小児撮影 | | |
| | 造影検査 造影検査 | | |
| | マンモグラフィ CT検査 | | |
| | 放射線治療 | | |

南棟・北棟・外来診療棟・建物階別一覧

社会が期待する地域連携と バランスのとれた病院運営

今後、地域との連携はますます重要になり、大学病院と地域の医療機関との役割分担を明確にしながら、社会が求める医療を提供していく必要があると考えています。近年、世界中で感染拡大が問題となっている新型インフルエンザ等の感染症対策では、大学病院は重症患者の受け入れなどに対応していかねばなりません。また災害拠点病院として災害時の対応も強化していきたいと考えています。本院では平成18年に救命救急センターを設置し、昨年はヘリポートも開港し、今後は福岡県災害派遣医療チーム(DMAT)として災害現場での医療活動にもより一層取り組んで参ります。

地域の医療連携をどう構築していくかは、これからの大きな課題です。生活習慣病などでは地域の医療機関の協力なくしては治療は果たせません。医療のクリティカルパスは九州大学病院だけで満たされるものではなく、地域の診療所や病院等との密接な連携体制が不可欠です。幸いにも福岡県は医療資源が多く、この恵まれた医療資源を有効に活用していくためにも、県や市の医師会等と協力しながら円滑で効率的なネットワークづくりを行っていききたいと思います。

また、地域医療に貢献するためには病院運営そのものが安定している必要があります。大学病院は法人化で厳しい経営を迫られていますが、病院運営の基盤を確立するために医薬品や医療材料費の経費節減や効率の運用を心がける一方で、より充実した医療提供にも努力しております。これまで以上に手術数を増やすとともに、手術待ちの患者さんを少しでも減らすことができると考えています。



平成20年に完成したヘリポート



外来診療棟前の新立体駐車場



最新のPET-CT2台、SPECT-CT4台を備えた「核医学・PETセンター」

利用者のアメニティにも配慮した 外来診療棟

新しい外来診療棟は、患者さん目線の利用しやすい施設をめざして計画しました。受付から待合までの動線を一本化して患者さんの負担を減らすとともに、総合受付とは別に各階にブロック受付を配置し、電照掲示を用いた案内表示システムによる呼び出しなど、わかりやすい案内を心がけています。また再来診療にも予約制を順次取り入れ、待ち時間の短縮を図っていきます。さらに、患者さんに便利ように立体駐車場を増設し病棟と外来診療棟の周辺に概そ700台の駐車場を確保しました。

1階のエントランスロビーは明るく広々とした空間で、情報コーナー、レストラン、喫茶店、コンビニエンスストアや観葉植物の緑などが配置され、機能性ばかりでなくアメニティにも配慮した空間になっています。

これだけの規模と設備を持つ病院は日本でも数えるほどです。今後は立派な施設に負けないよう診療内容を充実させ、信頼される全人的医療に取り組んでいきたいと思っています。これからの100年も、世界をリードする九州大学病院でありたいと願っています。



- ①1階ロビー
- ②総合案内
- ③レストラン
- ④ブロック受付
- ⑤ホスピタルモール

歯科と医科の連携で、 シームレスな歯科医療を提供

副病院長／口腔総合診療科長 樋口 勝規



先端医療を結集した 再生歯科・インプラントセンター

今回新たに設立された「再生歯科・インプラントセンター」は、九州大学病院歯科部門の先端医療を結集し、咬合再生・歯周組織再生・顎骨再生を行う部署です。歯科インプラントの普及率は高く、多くの開業施設で手がけられていますが、九州大学病院ではより高度な2次・3次医療としてのインプラント歯科医療を中心に取り組んでいきたいと考えています。そのため、歯科部門のいろいろな診療科からのスタッフが集まっています。CTやコンビームCT、その3次元解析といった画像診断に関する機器や画像処理機能も充実していますので、開業の先生方には画像診断依頼をご活用いただきたいと思います。また、歯学部では口腔組織の再生・再建医療と口腔健康科学の2大研究プロジェクトに学部をあけて取り組んでいますが、臨床においてもこれらの研究成果の実践の場として整備していく所存です。

医科とのコミュニケーションで 適切な治療を実現

九州大学病院は全国で初めて医科と歯科が一つの建物内で診療している大学病院ですが、これによって多大な効果があり、シームレスな医療貢献が可能になりました。歯科側のメリットは、医科とタイアップした有病者の歯科治療が迅速に行え、ICUや救急治療部などの共同利用によりリスクの高い患者さんの治療や術後管理が今まで以上に円滑に行えるようになりました。小児科・小児外科・小児歯科・矯正歯科といった小児・発育部門は一つのエリアで診療しており、患者さんの行き来もスムーズです。

医科、歯科双方のメリットとしては連携が強くなり、より高度

で適切な治療が可能となったことです。周術期や高齢の入院患者さんは、口腔ケアを適切に行うことが誤嚥性肺炎を主とした各種病気の予防につながります。近年言われているように口腔疾患と多くの全身的な病気には深い関連があり、歯科と医科は切っても切れない関係にあります。共同で診療にあたることで治療域も広がってきます。口腔に近い部位を扱う脳神経外科や耳鼻咽喉科・頭頸部外科と共同で手術にあたる機会もあり、先進予防医療センターとの関わりで九州の大病院では初の「歯科人間ドック」も立ち上げています。このように、九州大学病院では医科と歯科のコミュニケーションがうまくとれていてと自負しています。

地域連携と人材育成、 大病院としての取り組み

地域連携は、歯科部門においても重要な課題です。難しい治療やリスクの高い患者さんを受け入れる2次、3次医療機関として、歯科診療施設から依頼された治療を行うとともに、本院の治療の終わった患者さんを地域で引き続き診療してもらうための逆紹介のシステムも確立しつつあります。また、市の歯科急患診療所からの急患の受け入れや歯科医師会からの往診要請にも対応し、歯並び無料相談を矯正歯科が当院で2回実施しています。口唇口蓋裂に関しては、出産時に婦人科施設への往診を行っています。

さらに新たに立ち上げを予定しているものには、本年12月に開催する「歯科臨床セミナー」があります。九州大学病院歯科部門の先進的歯科医療を広く紹介していく目的で、今年からスタートします。また、歯科医師を対象としたインターネット上で歯科相談窓口を、来年を目標に開設予定です。これは、治療に困った症例について相談をお受けするシステムで、地域の先生方に活用していただけるものと思います。

新たな歯科医師の育成も大病院の大切な役割であり、現在64名の臨床研修歯科医を受け入れています。臨床研修には3つのプログラムがあり、研究者や指導者をめざす方は大学での単独型研修、開業をめざす方は協力型施設を含めた複合型研修を選べます。いずれのコースでも、地域や社会のリーダーになる資質を育成したいと考えています。また、後期研修を受けながら研究を行える社会人大学院があり、この制度は研修歯科医だけでなく開業されている先生方も活用されています。臨床研究をめざす方のための臨床歯学博士コースは、全国で九州大学だけに設置されているものです。今後も診療・教育・研究という大病院としての役割を大切に、高度な歯科医療を提供していきたいと考えています。

地域と連携しながら、 小児医療・周産期医療の充実をめざす

副病院長／小児科長／小児医療センター長 原 寿郎

子どもの心と身体を診る 集学的医療体制

近年、小児医療や周産期医療を取り巻く厳しい現状が報道されていますが、九州大学病院では小児科・小児外科・産科婦人科が連携し、全国的にも充実した医療を行っている施設だと自負しています。ただし福岡県全体を見ると、小児・周産期医療が不足している地区も実際に存在しています。地域の医療に貢献する役割のある大学病院としては、県と協力して地域医療の充実にも力を入れていきたいと考えています。

平成元年から20年に渡って活動を続けてきた九州大学病院周産母子センターは、昨年3月に福岡県の総合周産期母子医療センターに指定されました。国立大学として初めて周産母子センターを設置し、全国に先がけて産科婦人科・小児科・小児外科が一体となった集学的医療を展開してきたことが、現在の成果につながったものと考えています。周産期医療は一つの診療科だけでは成り立ちません。それぞれの診療科が充実して初めて、高度な医療体制を築くことができます。

また小児医療の分野においても、小児科・小児外科を中心に各科が参加して集学的医療を提供する小児医療センターを設置しています。ここでは患者さんと家族のQOL向上をめざし、建物にも子どもにも親しみやすいデザインを取り入れ、プレイルームやライトコート(中庭)、院内学級などを設置しています。一般市民によるボランティア活動も活発で、読み聞かせの会などが定期的に開かれています。

本年5月に新たに開設した「子どものこころの診療部」は、社会的にも関心の高い子どもの心の問題に対応するユニークな診療部です。院内の小児科、精神科神経科はもちろん、教育や心理を専攻する学内の人間環境学府も参加し、さまざまな側面から患者さんの問題にアプローチすることができます。総合周産期母子医療センターや小児医療センターとも連携し、総合大学である九州大学の強みを活かした診療を行います。加えて今後は市や県の児童施設とのネットワークをさらに充実していきたいと考えています。

母子主体の総合研究の成果を 地域・国民に還元

こうした総合力を活かした取り組みのひとつが、今年で20回目を迎えた「福岡国際母子総合研究シンポジウム」です。小児科・小児外科・産科婦人科・小児歯科・精神科神経科を中心メンバーとした母子総合研究リサーチコアが母体となり、母と子の健康に関する医療・医学および周産期医学のさらなる発展をめざして活動しています。母子を主体とした総合研究



の取り組みは全国でもめずらしく、シンポジウムには外部から多くの医師等が参加しています。地域の医療関係者にもぜひ積極的に参加していただきたいと思います。

地域との連携においては役割分担がもっとも重要だと考えています。大学病院には最先端の医療を提供する役目がありますが、大学病院だけではできないこともたくさんあります。本院の集学的機能は高く評価され、患者さんの紹介も多いのですが、ベッド占有率は常に100%を超えています。救命救急にも小児科・産科が参加しており、地域の先生方との情報交換で優先順位を決定していくことは非常に重要です。また今後はアジアなど海外からの入院患者が増えることも予想され、福岡のみならず九州という地域全体で医療を支えていくことが必要とされています。そのためには地域全体での人材育成も大きな課題であり、今年度立ち上げた「周産期ゆりかごネットワーク」では、北部九州における周産期医療を担う高度な人材を育成していく計画です。

新しい外来診療棟が完成すると、予約制度が充実して待ち時間を減らすことができます。また外来～入院～検査といった一連の動線がスムーズになり、特に受付と外来が離れていた小児科・小児外科は動線がかなり短くなり小さなお子さんの負担も減らすことができます。今後も患者さんが満足する医療をめざし、地域と連携しながら活動していきたいと思っています。

専門家集団による総合力で、 3次救急医療に立ち向かう

救命救急センター長／先端医学工学科部長 橋爪 誠

アジアを含めた広域での 救命救急が今後の使命

地域の医療機関では対応できない3次救急医療のため、九州大学病院の救命救急センターでは救急専門医はもちろん、集中治療部、麻酔科蘇生科、心臓血管外科、一般外科、循環器内科、消化器内科、脳血管内科、脳神経外科、小児科、整形外科、血液内科などの専門医がチームを組んで、どのような疾患・外傷でも24時間対応できる態勢を整えています。あらゆる疾患に応じた専門各科とのスムーズな連携により、大学病院ならではの総合力を活かした高度な医療を提供することが可能です。新病院はICU、NICU、CCU、ヘリポートなどの施設を備えており、集中治療室を出た患者さんにも十分な治療が行えるハイケア病棟も充実しました。

本院の救命救急センターは、西日本全域およびアジアの中でも重要な役割があると認識しています。市街地に近く利便性のよい福岡空港に近接しているため、全国で最も空港に近い救命救急センターであり、アジアを含めた広い地域から患者さんが運び込まれます。また災害拠点病院として広域災害時の後方支援も使命と考えています。災害派遣医療チーム(DMAT)として現在3チームを編成し、静岡県での総合防災訓練に派遣するなど、各種のシミュレーション訓練を定期的に実施しています。

人材育成、啓蒙活動、 地域連携などの課題にも対応

さらに人材育成や、一般への啓蒙活動も大学病院として重要な使命です。人材育成に関しては医療従事者の指導はもちろんですが、毎年院内すべての職員に心肺蘇生法を訓練しています。救急医療では、いかに早く治療を開始するかで生存率が大きく変わるのをご承知の通りで、一般市民の皆さんが救急に関する知識や技術を身に付け、救急隊が到着するまでの間に救命活動を実践していただくことが大切です。そのための市民向けの講習会や普及活動にも力を入れています。

加えて重要なのが地域の医療機関との連携です。救急医療は地域全体で取り組むべき課題であり、来る9月12日には九州大学病院地区において「地域連携と救急医療」をテーマに第28回福岡救急医学会学術集會を開催します。医師、看護師、救急救命士のほか、医療関係者の皆さんには、ぜひ参加していただきたいと思います。また救急専門医、医師会、自治体等と一緒に救急病院を機能別にリストアップし、患者さんの重症度や緊急度に合わせて最適な施設へスムーズに搬送できるよう、政策提言を行っています。この患者搬送システ



ムが整備されれば、これまで以上にスムーズな患者さんの搬送が可能となります。現在、九州大学病院では消防隊や福岡済生会病院と連携し、救急医療に関する症例検討会を開催し、相互に処置内容などの検討を行うことで救急搬送や各々の病院での救急医療の改善に役立っています。今後はこの活動を、できれば福岡県全域に広げていきたいと考えています。また救急治療を終えた患者さんを受け入れていただく、後方支援病院のネットワークも構築しなければならないと考えています。

救急医療の一分野として取り組んでいるのがロボット医学工学科です。内視鏡手術やロボット手術などの技術は進んでいますが、まだまだ日本では医療機器として十分活用されているとは言えません。北九州市のテムザックなどと共同開発したプレホスピタルケアロボット(病院前救護ロボット)は、患者さんに座っていただくだけで血圧測定や心電図測定など各種情報を自動的に計測し、瞬時に必要な応急処置を施すことを目指しています。また収集された情報を基に遠隔地から処置の指示を送り、最寄りの所まで遠隔操作で患者搬送することも可能です。一刻を争う救急医療ではロボットを活用した取り組みには大きな意義があると考えています。今後はプレホスピタルケアロボットの事業化を行い、公共の場所に設置して活用してもらえような国際標準の機器にしていきたいと考えます。ドイツやイタリア、早稲田大学や金沢工業大学等、国内外のロボット工学や医療研究者などが企業と連携して技術開発に取り組む「ベータ国際ロボット開発センター」も本年4月に福岡県宗像市に開設され、今後国内外の研究者とともに、世界に役立つ技術を一層発信して参りたいと考えています。

「未来医療」を「現実医療」とするための 先進的取り組み

高度先端医療センター長／呼吸器科長 中西 洋一

新しい医療技術を できるだけ早く世の中へ

九州大学病院の大きな使命の一つに、未来へつなげる新しい医療を開発することがあります。九州大学には遺伝子治療や細胞療法、情報型医療機器などに関する優れた研究がありますが、これらを医療の現場で実際に役立つ医学として応用するためには、さまざまな課題があります。基礎医学と臨床医学の乖離は、九州大学病院だけでなく日本の医療システム全体が抱える大きな問題です。こうした課題を多くの専門家が協力して解決し、いわば「未来医療」を「現実医療」とするための支援機関として誕生したのが高度先端医療センターです。

基礎医学を適正かつ安全に臨床の現場へとつなぐTR(トランスレーショナルリサーチ)には、多様な専門的アドバイスや業務支援が必要とされます。特許に関する知財の専門家、法律や薬事の専門家、治験のデータ収集やサポートを行う専門家、そして治験薬等の適正管理と製造工場の運営などです。当センターでは100人以上の医学、歯学、看護学の専門家に加えて生物統計学者なども活動に参加し、安全かつ適正に研究が実施されているかどうかを定期的にチェックして研究者に助言や勧告を与えています。また九州大学院では臨床研究に参加する医師・研究者は、倫理・法規・科学的事項・業務などの講義を受け、指定する試験に合格することを義務づけています。このように医師や研究者が苦手とする分野を支援することで、新しい医療技術をできるだけ早く世の中に出すために組織的にサポートを行っています。

西・南部日本のTR拠点として 幅広く活動

現在、こうしたTR拠点は全国7か所にあります。神戸以西では九州大学病院にしかありません。そのためTR開発の西の拠点として、西部日本・南部日本におけるシーズ(新しい医療技術の種)の育成、実用化・産業化も大きな役目だと考えています。実際、支援を行っているシーズには愛媛大学の研究も含まれています。佐賀大学・長崎大学の協力も進行中です。シーズは基礎・臨床を問わずさまざまな現場に存在していますので、今後も実現化の可能性のある研究を探していきたいと考えています。また研究者だけでなく、臨床の現場からのシーズの持ち込みも歓迎しています。有望な医療技術を実際の診療現場に取り入れている先生方もおられると思いますが、限られた範囲での実施では世の中に普及していきません。これを育てていくのも当センターの役割です。



シーズの情報提供・相談に加え、地域の皆さまにお願いしたいことは、情報交換です。患者数の少ない病気などの場合、いかに治験に参加してくださる患者さんを確保するかが重要な課題になっています。優れた医療技術があっても、適正な治験を経て早く世の中に出なければ画期的な新しい治療は受けられません。ぜひ地域の多くの関係者にご協力をお願いしたいと思います。

福岡県における臨床試験体制の整備の一環として、NPO法人治験ネットワーク福岡の活動が昨年6月に開始しました。福岡県に加えて県内4つの大学病院が参加し、情報交換をしながら治験業務の効率化、治験に関するさまざまな問題の改善をめざしています。さらに九州各地の大学が参加する九州臨床研究支援センターも設立されました。こうした治験と臨床研究を支えるネットワークが整備されている地域は国内では九州だけです。現在は大学病院が中心のネットワークですが、次の段階として今後は地域の基幹病院にもぜひ参加していただきたいと考えています。

一般市民にも協力していただく治験業務には広報活動が不可欠です。九州大学病院では知財セミナー、市民公開講座などの普及活動にも力を入れ、治験業務や当センターに対する啓蒙活動を行っています。適正かつ安全な臨床研究を推進し、明日の医療へと役立てるため、今後も皆さまと一緒に考えながら、歩みを進めていきたいと考えています。

看護の専門性を発揮し信頼される より質の高い看護をめざして

看護部長 中畑 高子

看護外来の充実や 検査説明集約の取り組みを

特定機能病院として高度で先進的な医療を求められる九州大学病院では、看護についても確実な看護の実施と高い専門性が求められています。このたびの新外来診療棟の開院にあたり、特に外来を受診する患者さんにとって看護はこれからどうあったらいいのか考えました。在院日数の短縮化がすすみ、外来では医療ニーズの高い患者さんの対応が増えています。その現場で新たな役割と機能を期待されているのが、ひとつには外来看護の専門性であると思っています。

本院においても、現在、妊娠中の経過や産後の不安・トラブルに助産師が対応する助産師外来、皮膚・排泄ケア認定看護師によるストーマ看護外来、糖尿病療養指導士でもある看護師が処置を行う糖尿病フットケア外来を設け、受診した患者さんに高い評価を得ています。このほか患者さんのQOLを考えた腹膜透析外来でも腹膜灌流に関する療養指導を行っています。また、新しい外来診療棟では、これまで各診療科ごとに行ってきた各種検査説明の窓口を統一することにしました。専門的な検査説明は各科で行いますが、消化管透視や内視鏡等共通の検査は1階に設けられた検査説明室で対応し、患者さんにとって安心して安全性の高い説明を確保することとしています。

この他にもさまざまな専門能力をもった看護職員がいますので、多くの分野で今後も患者さんのニーズにそった看護の提供ができるのではないかと計画しているところです。

高度な看護実践能力を持った 人材育成のために

より高度で専門的な看護を求められる本院では人材育成も重要な課題です。医療の質は人材の質でもあると考えていますので、日々進化する医療に対応できる看護職員の育成が計画的かつ継続的に必要になってきます。そのため、1,100人を超える看護職員を対象に、臨床看護実践能力の向上、専門的看護の実践能力向上を目的にクリニカルラダーを基盤にした教育プログラムを実施し、レベルに合わせた人材育成を行っています。また、質の高いジェネラリストの育成と同時に大切なものが、専門的な看護実践能力をもつスペシャリストの育成です。そのため認定看護師・専門看護師の資格取得も奨励しています。近い将来専門看護師も活動する予定です。現在本院には、各分野の認定看護師は19名いますが、今のところ30名程度には増やしたいと考えています。資格取得のために経済的な支援も行っており、認定看護師によ



る連絡協議会も立ち上げました。各部署で認定看護師を有効活用してもらおうと、ニュースペーパーを発行するなど自主的な活動を行っています。また、認定看護師を活用し、褥瘡ケア、呼吸管理等の院内認定看護師制度を発足し動かしているところです。

認定看護師等の資格取得には現場では大きな負担が生じるため、地方の中・小規模の病院では取得が難しいのが現状です。本院で資格取得を奨励しているのも、地域を視野に入れた人材の育成を考えているからです。九州大学病院で勉強した看護師が地域に出て活動したり、地域の方々が本院で看護を勉強することも考えられるでしょう。九州大学病院の看護師は非常に優秀で、真面目に質の高い看護を行っているとお自負していますが、これまで日頃の看護の実践をあまり外部に出してきていませんでした。看護部の組織にとっても地域にとっても非常にもつたいないことです。診療と同じく教育や研究も重要な役割である大学病院では、看護もその役割を負い、積極的に情報発信して社会の評価を受け、自らが質を高めていく必要があります。そのため4年前から看護部概況書を年1回発行し、講演依頼や執筆依頼にもできる限り応じるようにしています。学会活動も含め、こうした活動も地域貢献の一つと考えています。

看護師に求められる資質はたくさんありますが、いつも私が言うことは、一人ひとり自分の頭で考え、適切に判断し、行動できる人になってほしいということです。地域の皆さんには九州大学病院の看護師を積極的に活用していただき、地域と一緒に看護の質を高めていきたいと考えています。

地域医療の未来を支える 優れた人材育成のために

臨床教育研修センター長／総合診療科長 林 純

研修医はもちろん 良質な指導者も育成

九州大学病院の臨床教育研修センターは、平成16年の新研修医制度開始に合わせて設立され、平成18年から始まった新歯科医師研修制度と合わせ、現在は医師と歯科医師の卒業教育を統括する部門となっています。新制度が始まった当初は指導にあたる医療現場にも戸惑いがあり、当センターでは研修内容のプログラムづくり、採用試験、研修医の評価・管理などを行い、現場を支援してきました。

新しい研修制度では、研修医は2年間多くの診療科をローテーションする仕組みになっています。この点、九州大学病院には数多くの診療科があるため、研修医がさまざまな診療科で経験を積むことができます。また院内の高度先進医療の現場で研修することも可能であり、外部での経験を積むために研修協力病院での研修も可能です。多様な選択肢があることが本院の研修プログラムの大きな魅力のひとつだと考えています。

新人の育成には良質な指導者を育成することが大切です。九州大学病院では臨床研修指導医講習会を開催していますが、この講習会には研修協力病院や協力施設の指導医にも参加していただき、医学教育の講義などが行われるのはもちろん、外部の指導医との情報交換・交流の場としても大きな役割を果たしています。研修の実態や問題点が議論され、より良い改善案が出されたり、九州大学病院の持つ情報や技術を広く公開していく意味でも、講演会の開催は大学病院の重要な責務のひとつです。

また、九州大学病院が中心となり福岡県の19の地域医療機関と福岡市医師会が主催する、研修医のための「福岡臨床研修セミナー」も平成17年から年2回、実施しています。主催者側にとっては新人育成に関する情報交換の場となり、研修医はさまざまな医療機関の医師の講義を聴くことができるため、医療知識の幅も広がります。さまざまな利点から、このセミナーは年々盛況となっています。

より高度で専門的な 教育のためのプログラム

新研修制度のもとでは多彩な経験が積める一方で、どうしても専門教育への取り組みはプログラムの中で遅れがちになってしまいます。そのため九州大学病院では研修2年目をより専門的な教育にあてるようなプログラムを設定しました。とりわけ医師不足が懸念される小児科・産科婦人科では特別コース「九州大学病院周産期・小児・産科系重点研修プロ



グラム」を準備しています。母子メンタルヘルスや児童精神研修も取り入れ、こころの問題にも対応できる小児・産科医を育成するプログラムです。

3年目以降の後期専門研修でも、より幅広い視野で研修が行えるよう配慮しています。その取り組みのひとつが新たにスタートする「北部九州における循環型高度医療人養成事業」です。九州大学・佐賀大学・福岡大学が連携し、3つの大学病院のみならず、それぞれの地域の関連医療機関も含めた医療機関を循環して研修が受けられるプログラムです。幅広い経験を積むことで質の高い総合医、専門医、臨床研究者を養成するとともに、地域での情報交換を積極的に行ない、地域医療の活性化をめざしています。また各大学間の指導医・研修医が互いに相互評価を行うことで、より効果的な指導体制を構築し、その後のネットワークづくりにも役立てていく所存です。

当センターでは職員に向けての教育も担当しており、各診療科持ち回りで開催される勉強会「九州大学病院グランドラウンド」をはじめとしたセミナー等の企画・統括を行っています。地域医療に携わる先生方には幅広い知識や技術、経験を持つ方も多く、医学の発展に寄与したいと考えている方も多いと思います。ぜひ大学の研究や新人育成に協力いただき、地域医療の活性化に関与していただきたいと考えています。これまでは医師の補充という観点での連携が中心でしたが、今後は地域全体で若い医師を育てる視点を大切に、地域との連携に取り組んで参ります。

世界最高水準の検査機器で 医療全体の底上げを図る

放射線科長／放射線部長／先進予防医療センター長 本田 浩

ますます重要性が高まる 放射線部門の充実

新しい外来診療棟の完成とともにオープンする「核医学・PETセンター」は、最新のPET-CT2台、SPECT-CT4台を備えた世界でも最高水準にある検査・診療施設です。これだけ充実した設備は日本一だと自負しています。これら最新鋭機器の導入によって、得られる画像の質は飛躍的に向上し、これまで以上に詳細で正確な診断が可能となりました。新たに導入されたSPECT-CTは核医学検査とCT検査が同時にでき、双方のデータを組み合わせて画像化することでより詳細で精度の高い情報が得られ、機能・代謝に関する情報もわかりやすく表示することが可能です。新しい機器によって検査時間も短縮され、一度の検査でさまざまな情報が得られるなど、患者さんの負担も軽減されるようになりました。しかしながらPET-CTは、本院にサイクロトロンがないため、その効果が十分に発揮できていません。一般に行われているFDG-PET検査は施行可能ですが、世界で次々と開発されているその他の薬剤に関して、本院ではまだ使用できない状況です。今後、サイクロトロンが導入されれば、名実共に日本一の核医学・PETセンターとなると思います。

詳細でわかりやすい画像情報を提供する放射線部門は、近年の医療においてますます重要性が高まっており、九州大学病院内においても医療の中核部門となっています。現在、画像診断は九州大学病院の医科・歯科を問わずすべての診療科で活用されており、本院のあらゆる医療の質の底上げに貢献していると考えています。また、がん治療などにおいても放射線治療は大きな柱となっており、今後ますます需要が増えることが予想されます。切らずに治す放射線治療やイントーブ治療、低侵襲治療は、患者さんにやさしい医療でもあります。こうした医療ニーズに応えるためにも、世界水準の環境を整えることは重要だと考えました。

九州大学病院は地域の中核病院でもあり、地域トップレベル

の画像診断・放射線治療を行うことが求められています。放射線部門では九州一円の診断・治療を担っています。またMRI分野においてアメリカの大学との共同研究も行っています。今

後はアジアをはじめとした海外との連携も重要と考え、医療分野での発展途上へのサポートにも取り組んでいきたいと思っています。

人材育成にも力を入れ、高度な知識と技術を持った放射線科専門医、放射線技師を育成しています。九州大学は日本一多くの放射線科専門医を輩出していますし、研修を希望する技師も積極的に受け入れるようにしています。



高精度の検診を実施する 先進予防医療センター

放射線部門の充実した検査機器と技術を活かす取り組みの一つに「先進予防医療センター」があります。がん、心臓疾患、脳血管障害などの早期発見・早期治療をめざして、専門スタッフが最先端の技術と知識を活かした先進的で高レベルな検診を行っています。最新医療機器を活用するので小さな病変も高い精度で発見することができ、検査後のフォローアップも九州大学病院内の各専門診療科で対応することが可能です。予防のためにもぜひ気軽に受診することをおすすめしています。

現在、がんの総合検診や各部位別のがん検診、心臓、脳卒中などのドックコースが設けられていますが、九州大学病院独自の検診コースとしてはアルツハイマードックと歯科人間ドックがあります。アルツハイマー病は早期のうちに発見して治療を開始すれば病気の進行を遅らせる薬剤も開発されており、精神科神経科や神経内科と協力して検診にあたっています。また歯科部門との連携により、全国でもめずらしい歯科人間ドックも開設しました。これらのコースは必要に応じて組み合わせ受診することも可能です。

核医学検査についても医療関係者にもあまり詳しく知られておらず、正しく理解している方は少ないのではないのでしょうか。充実した核医学・PETセンターの開設で、核医学検査に関しては地域の医療機関からの検査依頼を受ける余裕も生まれました。検査の適応や前処置などに関する不明点、疑問点などは遠慮なくご相談ください。本院を地域のの中核病院として今まで以上に有効に活用していただきたいと思います。

